

## 「大漁」中島潔

2001年（平成13年）

縦171.4cm × 横342.4cm 屏風

「朝焼小焼だ／大漁だ／大羽<sup>おほばやし</sup>鱈の／大漁だ。  
濱は祭りの／やうだけど／海のなかでは／何萬の／鱈のとむらひ／  
するだらう。」

金子みすゞの「大漁」をテーマに描いた作品です。

画面から溢れ出んばかりの勢いで横切る鱈（イワシ）の群れ。みすゞの真っ直ぐなまなざしは、生きていくために他の生命を奪わざるを得ない人間の現実を見つめています。

「ものいわぬ『命』の凄み、壮絶さを表現するため」に、鱈の目を白く浮き立たせたのだと作者は語ります。

（特別展「風の画家 中島潔が描く金子みすゞの世界」に展示。期間は8月1日～9月15日）

## 特別展

風の画家 中島潔が描く金子みすゞの世界  
- 詩人・金子みすゞからパリそして日本の四季まで -

2008. 8.1(金)～ 9.15(月・祝)

今にも懐かしいわらべ歌が聞こえてきそうな、诗情あふれる古里の風景。そして、うつろう四季のなかで無邪気に遊ぶ子どもたち。誰しもが心の中に持つ日本の原風景を鮮やかに描き出し、見る人の心を優しく包み込む画家・中島潔。

本展では、中島潔が金子みすゞの詩の世界を描いた作品、そしてパリと日本の四季に遊ぶ子どもたちを描いた作品、全70点を紹介します。

金子みすゞ(本名・金子テル)は、明治36年(1903)に山口県大津郡仙崎村(現・長門市仙崎)に生まれました。家が書店を営み、幼い頃から本に囲まれ感性豊かに育った彼女は、20歳の時から童謡雑誌に投稿を始めました。自然界の小さな命や日常の出来事を独自の視点で詠んだ作品は、詩人・西條八十から「若き童謡詩人中の巨星」と称賛され、将来を期待されましたが、26歳の若さで自ら命を絶ちます。死後50余年を経て3冊の遺稿集が発見されたことで、その作品と生涯は鮮やかに甦り、小学校の国語教科書に詩が掲載されるなど、現在最も愛される童謡詩人の1人となっています。

みすゞの詩と出会い、鮮烈な印象を受けた中島潔は、彼女の詩を貫く「生命の尊厳」を自らの絵筆で表現しました。それは単純に詩を題材にした絵画作品というよりも、みすゞの詩と中島潔の絵が時空を越えて共鳴し合った、新たな世界と言えるかもしれません。生命を見つめるみすゞの「まなざし」を感じてください。

パリは、28歳の中島潔が本格的に絵の勉強をしようと訪れた街です。もぐりの学生として国立美術学校で学び、フランスの美術館巡りを重ねて、自身のルーツである日本的な絵を描いていく決心をしました。そして、60歳を機に再び原点の街パリに住み、意欲的に制作に取り組みました。その成果が、フランスの四季の中での人の営みを、光や色、風などの変化を一瞬のそ



「夢みる頃」 1997

よぎでとらえた作品です。

中島潔の作品の中で最も多くの人に親しまれている、古里の四季に遊ぶ子どもたちを描いた童画。季節の草花、日の光、風のおい、細やかに季節を感じ取る日本人の心を中島潔は描き出します。「風の画家」中島潔が紡ぎだす、美しい季節の風をお楽しみください。

### 関連行事

#### ◆中島潔サイン会とギャラリートーク

8月1日(金)

午前11時～・午後2時～ サイン会

8月2日(土)

午前11時～ ギャラリートークとサイン会

午後2時～ サイン会

8月30日(土)

午後1時～・午後3時～ サイン会

※サイン会は各回開始1時間前から、売店にて先着100名様に整理券を配布します。

サインは売店でお買い上げの図録、画集、額絵などに限らせていただきます。

#### ◆中島潔絵本原画「マッチ売りの少女」とおはなし会

毎週日曜日 午前11時～・午後2時～

出演：岐阜市立図書館 おはなしボランティア

特別展会場出口のロビーにて、中島潔が挿絵を描いた「マッチ売りの少女」の原画9点を展示します。日曜日には、この展示スペースにおいて子ども向けの絵本や詩の朗読を行います。

#### ◆ぬり絵・折り紙コーナー

毎日 午前10時～12時、午後1時～4時

#### ◆展示説明会

毎週火～金曜日(8月1日を除く)

午前11時～、午後2時～

歴博ボランティアによる展示説明(約20分)

8月9日(土)、23日(土)、9月6日(土) 午前11時～  
当館学芸員による展示説明

## 特別展

# 兼定と兼元 - 戦国時代の美濃刀 -

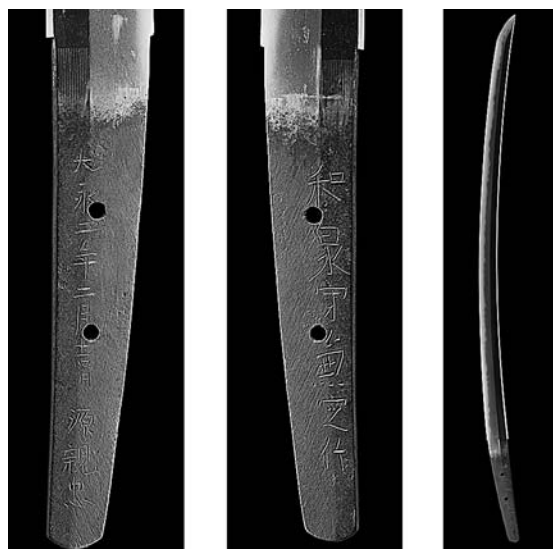
2008. 10. 24(金)～ 11. 30(日)

刀は武器でありながら、それにとどまらない高い精神性と芸術性を兼ね備え、現在でも美濃を代表する工芸品のひとつです。美濃国ではおよそ南北朝時代に西濃周辺の地域で刀の生産が始まったとされ、やがて室町時代に入るとその中心は関へと移っていきました。大和や山城など他の有名な産地に比べると、刀の生産地としてはやや遅れて成立した美濃ですが、戦国期の刀の需要の増加に伴い、当時全盛を誇っていた備前に次いで多くの刀が作られました。

数多くの刀工を輩出した美濃で、名工として全国に名を知られるのが二代和泉守兼定と二代兼元です。彼らは室町時代中頃の永正～大永年間（1504～1529）を中心に活躍した刀工で、その作品は鋭い切れ味が特徴とされた美濃刀のなかでも、よく切れる刀の代名詞としても知られています。

二代兼定はその銘の「定」の字が特徴的で、うかんむりの中に「之」ときったことから「<sup>の</sup>之<sup>さだ</sup>定」と呼ばれています。関で作刀活動を行なった兼定は同時代の美濃の刀工の中では群を抜いて腕がよく、刀の鍛え上げられた地肌の美しさには目を見張るものがあります。また、刀鍛冶としては初めて和泉守という受領銘を使ったともいわれ、残された作品からは守護代斎藤氏とつながりを持っていたことがうかがわれます。

二代兼元については、「関の孫六」という名前を耳にする機会のほうが多いかもしれません。しかし、実際に二代兼元が活動していたのは、現在の大垣市赤坂付近でした。「三本杉」と呼ばれる独特の尖った刃文で知られ、豊臣秀吉や九州の黒田家などの有力な大名が好んで所持しました。その切れ味に由来する号のつ



刀 銘 和泉守兼定作 大永二年二月吉日 源親忠  
(大阪歴史博物館蔵)

いた名刀が多いのも、兼元の特徴です。

展覧会では、この二人の作品およそ40点を一堂に集め、戦国期の美濃刀の魅力に迫ります。大名家ゆかりの名品や、年号の記された貴重な作品を紹介し、その作風や作刀活動の様子を探るとともに、室町時代から江戸時代にかけて兼定・兼元の刀をはじめ美濃刀がどのように評価されたのかを文献史料から考えていきます。

刀剣産地・美濃を代表する名工とその作品を通して、美濃刀の魅力をあらためてごらんいただきたいと思います。

### 関連行事

#### ◆講演会

日時 11月16日(日)  
午後2時～  
講師 佐野美術館館長  
渡邊妙子さん  
題目 「日本刀の魅力」

#### ◆展示説明会

イベントのない毎週日曜日  
時間 午前11:00～午後2:00～  
講師 当館学芸員

## 長縄士郎展

2008. 9.9(火)～2008. 10. 19(日)

岐南町出身の日本画家：長縄士郎の自選展を開催します。

長縄士郎は1923年（大正12年）、岐阜県羽島郡岐南町八剣に生まれ、1948年、第4回日展に岐阜市加納で取材した「傘干し」が初入選、以後、連続入選を果たしました。1952年、第8回日展の「店粧」が、岐阜市美殿町出身で最も尊敬する加藤栄三の目に留まり、お褒めの言葉をいただいたのが縁で、その門下生となり指導を受けるようになりました。

翌年、結婚し長良橋界隈の湊町に居を構えましたが、以後、その才能が開花し、1957年、第13回日展「浴室」で特選・白寿賞を受賞しました。翌年、日展は社団法人化され新日展として再出発しますが、1963年、第6回日展「舞妓」で2回目の特選・白寿賞を受賞、1964年には、この業績が認められ「岐阜県芸術文化研究功労者」として顕彰されました。

さらなる飛躍を期して、1967年、岐阜を離れ鎌倉に移り住み、1968年には加藤栄三、山田申吾、加藤東一、大山忠作などと、インド・ネパールに取材旅行に出かけ、しばらく海外取材による人物を日展に出品し新しい境地を開拓します。

しかし、1972年、大恩ある師：加藤栄三の突然の死に接し悲嘆にくれますが、その悲しみを乗り越え、翌年の1973年、初の日展審査員に就任、以後、日展審査員に6回就任しています。

長縄士郎の日展出品作は主に人物が中心ですが、その背景に描かれている風景をみると、故郷岐阜が多く描かれています。「涼」（1966）、「篝火」（1974）、「長良川（涼）」（1985）、「水辺」（1989）、「あか



「傘干し」

り」（1998）など9点の日展出品作に長良川の水辺、鶉飼などが描かれ、主人公として描かれた女性とともに美しいハーモニーを醸し出しています。いかに故郷岐阜を愛し、思い入れが深いかが伺われます。

1982年に紺綬褒章、1985年に岐阜日日教育文化賞（現岐阜新聞大賞）、2002年に勲四等瑞宝章など、その功績に対し多くの褒賞を受けます。

その間に、下呂水明館の緞帳「四季の彩り」、中津川市民病院の壁画「四季賛歌」、長良川国際会議場大ホール緞帳の原画制作など、大きな仕事をされました。

1992年、第24回日展「聴春」で内閣総理大臣賞を受賞、その受賞記念展として銀座松屋で「長縄士郎の素描」展が開催されます。その画集の中で加藤東一は次のような文章を寄せています。



「聴春」

「絵は作家の自画像と云われますが、特

に素描にはその人格がよく現れます・・・人物を主体に花鳥が多い事と思いますが、士郎さんらしい、素直で誠実なものと思います。ことさら気張ったり、作意をもたないで、素直に物をよく見る事は、作家にとってとても大切な事と思います。ある作家が、自然が一番いい師だと云っている。」（1993年発刊「長縄士郎の素描」より抜粋）

この推薦文のとおり、長縄士郎の作品は、まさに作家の自画像だといえます。堅実な構成力、明快な色調は鑑賞する者の心を癒し、清々しいものにしてくれます。

今回は、日展初入選作、特選受賞作2点、内閣総理大臣賞受賞作などの代表作とともに、日展作品を中心に約20数点を展示し、長縄芸術の真髄とその功績を顕彰します。

本展は、当館の第1・2展示室、全館を使って栄三・東一以外の作家作品を一堂に展示する初めての試みです。従って、栄三・東一作品は、この会期中は展示されませんのでご承知おきください。

## コスプレ楽市場の新アイテム

コスプレ楽市場は戦国ワンダーランドの体験メニューのひとつです。

戦国時代の衣装を当時の遺品を基準にした規格で作った場合、着付けが非常に難しくなることもあり、リニューアル時には、現代人にとって着付けやすく、ヴィジュアル的にも受け入れられやすいスタイルで衣装を製作しました。

その後、着付けをしていただけるボランティア側の体制も整ってきたこともあり、2006年度から順次増やしている体験衣装は、当初もくろんでいた戦国時代風の規格で作るようにしています。新アイテムの内訳は、直垂<sup>ひたたれ</sup>（身長165cm以上）・女性小袖（身長170cm以上）・女性小袖（身長150～160cm）<sup>うちかけ</sup>・女性打掛<sup>うちかけ</sup>・白小袖（身長135cm～150cm）<sup>うちかけ</sup>・男性小袖（身長135～150cm）<sup>うちかけ</sup>・肩衣袴（身長130～160cm）<sup>うちかけ</sup>・肩衣袴（身長120～135cm）です。

お客さまから、「大河ドラマとちがう」「時代衣装の着付けとちがう」などの質問やご意見をいただくこともありますが、「当時の遺品を参考にした寸法の衣装で、絵画に描かれているような着付けをめざしています」とお答えするようにしています。

また、裾をひきずらない衣装は、余裕があれば反物屋から楽市場のコーナーへ出て「なりきり」体験をしていただくことも推奨しています。

会場となる反物屋の営業時間は、9時30分から15時30分まで（12時～1時までは昼休み）となっていますが、ボランティアのみなさんに運営を委ねていますので、閉店を余儀なくされたり、すべての衣装に対応できないケースもございます。これが目的という方はあらかじめお問い合わせいただけると幸いです。



写真 稲沢市立大里中学校のみなさん(左から2番目の直垂と右端の小袖が新アイテム)

### ■特集展示（2階 総合展示室内）■

歴史博物館の一角に特集展示コーナーを設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。8月から11月の日程は次のとおりです。

- |                     |                |
|---------------------|----------------|
| 8月3日（日）まで           | 「日本の団扇」        |
| 8月7日（木）～9月7日（日）     | 「信長居館跡の発掘調査から」 |
| 9月11日（木）～10月13日（月）  | 「川合玉堂と金華の人たち」  |
| 10月16日（木）～11月16日（日） | 「武人画家と鷹図」      |
| 11月20日（木）～          | 「古文書に見る結婚と離婚」  |

### ■柳津歴史民俗資料室の展示■

分室・柳津歴史民俗資料室（岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階）では、8月から11月まで次の日程で展示を行います。観覧料は無料です。

- |                     |               |
|---------------------|---------------|
| 8月31日（日）まで          | 「故郷と戦地をつなぐもの」 |
| 9月2日（火）～10月13日（月）   | 「和傘の秋」        |
| 10月15日（水）～11月24日（月） | 「柳津の古地図」      |
| 11月26日（水）～1月12日（月）  | 「須恵器の世界」      |

## 古代律令制下の「飛驒工」

吉田 晋右

## 1. はじめに

ひだのたくみは、古代において飛驒国から律令政府に貢進された木工技術者集団である。その起源は明らかではないものの、遅くとも大宝令制定時にはすでに成立していたようである（『令集解』賦役令斐陀国条集解）。現在大宝令はすべて散逸しており、そのはっきりした形は分からないが、大宝令を改修した養老令でひだのたくみに関する規定がはっきりした形であろうか。

凡ソ斐陀国ハ庸調俱ニ免ゼ。里毎ニ匠丁十人ヲ点ゼ。四丁毎ニ廝丁一人ヲ給ヘ。一年ニ一タビ替ヘヨ。余丁ハ米ヲ輸シテ匠丁ガ食ニ充テヨ。正丁ニ六斗、次丁ニ三斗、中男ニ一斗五升。（賦役令斐陀国条）

これによれば、

- ・飛驒国は庸と調を免除するかわりに、里（後に郷）ごとに匠丁を10人差し出す（うち2人は炊事等の雑用を担当する廝丁）
- ・匠丁は一年交替で、点ぜられなかった者は匠丁用の米を輸送する（正丁6斗、次丁3斗、中男1.5斗）

とある。このような特殊な税を課せられた飛驒国は、いったいどれほどの負担を強いられていたのかを、上京した匠丁の労働状況と、飛驒に残った余丁の負担についての2点から考えてみたい。なお、史料にみられるひだのたくみは「斐陀匠」、「飛驒匠」、「飛驒工」、「斐太工」、「斐太匠」などと書き表されるが、ここでは「飛驒工」で統一して表記する。

## 2. 飛驒工の労働状況

慶雲3年（706）2月16日の勅の中に、諸国の匠丁の待遇に関する記述がある（『類聚三代格』）。それによると、10人に1人の割合で廝丁が与えられ、勤番中に公糧が給与され、任が終わり帰郷する時には賃銭（『延喜民部式』には「路糧」として1人一日米1升、塩1勺）が支給され、勤務日数は50日を越えないものとする、とある（『類聚三代格』）。しかし、飛驒国匠丁への待遇はかなり違っていた部分がある。勤番中の公糧の給与はあったが（『大日本古文書』2木工寮解・造宮省移）、廝丁の割合は4人に1人であったし（賦役令斐陀国条）、勤務日数は時代によって変化はあるものの、1年のうちの長期間

であったらしい（『類聚国史』107）。なお、帰郷する際に賃銭が支給されていたかを具体的に知ることはできない。

次に、飛驒工の人数についてを見ていく。里ごとに10人の匠丁を差し出すというのが原則であるが、飛驒国全体では何人になったのか。『和名類聚抄』によれば、飛驒国には3郡13郷とある。令規定の通りに各郷から10名の匠丁を出したならば、130名となる（うち26人は廝丁）。ところが、以下に示すように、実際には必ずしもこの原則が貫徹していたわけではないことがわかる。

天平17年（745）10月、造宮省および木工寮に配属された飛驒工の合計は105人である（正倉院文書）。実際には、造東大寺匠丁などとして派遣されている可能性も残されており（『続日本紀』天平元年4月辛巳条）、105人よりも多くの飛驒工が貢進されていると考える余地は残されているようである。弘仁10年（819）の官符によれば、飛驒工は130人とあり、翌11年（820）の『弘仁式』には100人を定員に定めている。以後60人にまで減らされる時期を経て、『延喜民部式』に100人と一応定められた（下図）。

飛驒工の人数

年	人数	出典
大宝元	里毎10	賦役令斐陀国条
天平17	105 (+ a)	『大日本古文書』
弘仁10	130	『類聚国史』
弘仁11	100	『弘仁式』
貞観8～10	60	『日本三代実録』
貞観18～元慶4	100	『日本三代実録』
元慶5	60	『日本三代実録』
延喜5	100	『延喜民部式』

弘仁式で定員がそれまでの130人から100人と減らされたのには2つの理由があると考えられる。1つは平安京を始めとする都作りが弘仁年間に入り落ち着きだしたことと、もう一つは相次ぐ飛驒工逃亡による飛驒本国の疲弊を考慮したものであろう。史料上では平安遷都ごろを境として、飛驒工逃亡に関する禁令がたびたびみられるようになる。前述の弘仁10年の記事によると、匠丁130人のうち廝丁が5人で、労働の日限が年間333日～350日に達しなければ帰郷も許されず、病気や雨天で仕事ができない日には食糧が与えられない、といった過酷な労働状況が報告されている（『類聚国史』）。平安京遷都にともなう造作工事は飛驒工をこうした過酷な環境に導いたようだ。律令政府は逃亡する飛驒工を捕まえ、また、彼らをかまおうとする者にも

罰則を設けるようになる。延暦13年(794)逃亡した飛驒工をかくまう国郡司・郷長・隣保を違勅罪に科し(『類聚三代格』)、延暦15年(796)諸国に逃亡した飛驒工の捜捕を命じた(『日本後紀』)。さらに、飛驒工逃亡は調庸未進と同じであるとし(『日本後紀』)、弘仁5年(814)には改めて捜勘せよと命じている(『類聚三代格』)。飛驒工逃亡が続けば、飛驒本国にはその供給源が次第に減っていき、当然残されたものたちにしわよせされる。こうした実情を踏まえて『弘仁式』は100名と定員を減らし、さらに60名としていったのではなかろうか。

### 3. 余丁の負担

次に、匠丁として都へ赴かなかった余丁の負担について考えることにする。飛驒国の民衆は庸調を免除するかわりに匠丁のための米を輸すことと斐陀国条は定めている。この「輸米」は庸調を納めることとどちらのほうが負担が大きかったのか。

賦役令歳役条・同調絹絶条によると、正丁の庸調は合わせて長5丈2尺、潤2尺4寸、すなわち1端である。その後、養老元年12月2日格で正丁の庸調は合わせて長4丈2尺を1端とすることになった(『令集解』賦役令集解)。潤はその後1尺9寸となった時期もある(『続日本紀』天平8年5月辛卯条)が、その後再び2尺4寸に戻り、『延喜式』まで4丈2尺×2尺4寸を1端とする制度はだいたいにおいて一貫して続いた。

次に、『続日本紀』天平元年4月庚午条に米1石と庸布4段と銀1両が等価であったとしている。さらに、『続日本紀』養老5年正月丙子条によると銀1両は錢100文に相当した。庸布1段は、先の養老元年格において長2丈8尺、潤2尺4寸の布とされているので、布1端に相当する錢は以下のように求められる。

2丈8尺：25文＝4丈2尺：1端に相当する錢  
結果、正丁1人あたりの庸調を錢に換算すると37.5文となる。

一方、飛驒国の正丁1人に課せられた輸米は6斗である。錢に換算すると60文となり、庸調を納めるよりも1.6倍の負担がかかることになる。同様に次丁、中男も計算すると、以下の表のようになる。

正規の庸調納付数量

課口	年齢(歳)	庸(丈尺寸)	調(丈尺寸)	合計(丈尺寸)	錢換算(文)
正丁	21～60	1. 4. 0	2. 8. 0	4. 2. 0	37. 5
次丁	61～65	0. 7. 0	1. 4. 0	2. 1. 0	18. 75
中男	17～20	免除	0. 7. 0	0. 7. 0	6. 25

飛驒国の輸米納付量

課口	年齢(歳)	輸米量(斗升)	錢換算(文)	正規の庸調納付数量に対する割合(%)
正丁	21～60	6. 0	60. 0	160%
次丁	61～65	3. 0	30. 0	160%
中男	17～20	1. 5	15. 0	240%

こうして見てみると、飛驒の正丁・次丁は他国の1.6倍、中男にいたっては実に2.4倍という負担を強いられていることがわかる(ただし、調には副物があるが、ここでは考えないこととする)。そのうえ、水害・干ばつ・虫害・冷害などの自然災害や不作のときには諸国の庸調は免除されることがあるが、飛驒工の貢進は免除されることはなかった(『令義解』賦役令水旱条義解)ことや、布よりも米のほうが都までの輸送をするのに大変であったことも考えると、飛驒国への負担は数字が示している以上に重いものであったと考えるべきである。

### 4. おわりに

このように、上京した飛驒工は他国の匠丁よりも劣悪な労働環境のもとで労役に就いた。その中で飛驒工の逃亡が相次ぐ結果となった。また、飛驒にいる者には庸調より1.6倍の負担がかかる輸米が課せられた。これらの要因から飛驒国は次第に荒れていくことになる。弘仁5年(814)の飛驒国解によると、

事畢ルノ日、課役ヲ規避シ他郷ヲ庸作シ、年ヲ積リテ帰ルヲ忘レ、未役ハ絶エズシテ国郡ハ罪ニ陥ル。加ウルニモツテ遺留ノ輩ハ相代ワリテ奉公シ、ソノ苦ニ堪エズシテ逝去スル者多ク、遂ニ父子ハ保タズ、夫婦ハ処ヲ別チ、邑里ハ墟トナリ、道路ノ通ズルコト希ナラシム。(『類聚三代格』承和元年4月25日)

とある。「年期がすんでも匠丁は帰ってこないため未役が絶えず、そのために国司・郡司は庸調未進と同様の罪を蒙らねばならず、残っていた者の中からかわりに都にかり出されることになるが、その苦しさに堪えられず逃げ去るものが多い。遂には家庭が破壊され、村は荒廃し、道路を通る人もまばらになってしまった」というのである。

律令制下における飛驒工は、天徳3年(959)に弾正の官人が修理職のあたりで飛驒工と乱闘した記事(『日本紀略』天徳3年3月22日)を最後に、史料上から姿を消すことになる。こうして令制によって定められた斐陀国条は、多くの飛驒国の民衆を苦しめた末に、令制と共に消えていったといえる。

# \*\*\*\*\* 館蔵資料紹介 \*\*\*\*\*

## 職人尽図

紙本著色 江戸時代中期  
縦 36.5cm、横 42.7cm

人々の姿や暮らしなどを題材とした風俗図のうち、さまざまな職業を主題にしたものを「職人尽（しょくにんづくし）」と呼びます。紹介する作品は、写真に掲載した①傘張りと風流踊りの囃子（はやし）のほか、②提灯張り、鉦叩き、漆器屋、③革師、ろうそく屋、瀬戸物売り、風流踊り、④髪結い、ふすべ革師、を描いた3図があり、4図で1組となっています。描かれた紙の大きさが2種類あることなどから、同じ工房で描かれた別組の作品を組み合わせた可能性があります。



画面右には、さしかけ傘と思われる、柄が長く鳳凰が描かれた朱色の傘と白傘が店先に看板のように掲げられており、筵敷の店内には×に組んだ竹と柄を結んでたてかけた傘に紙を張る職人の姿があります。周囲には糊を入れた播り鉢や傘紙、曲げている最中の竹なども配置されており、職業そのものを詳しく描き出しています。

また、画面左の傘屋の前では、黒い鳥の羽を挿した編み笠をかぶった2人が、身体を深く折り曲げて鉦や太鼓を叩いています。風流踊りは職業とはいえませんが、洛中洛外図のような都市の様子を描いた作品には見られるモチーフであり、この作品は職業を核にして町人たちの生活を描いたものといえるでしょう。

\*\*\*\*\*

## 利用の御案内

- **開館時間** 午前9時～午後5時  
(入館は午後4時30分まで)
- **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日  
(月曜日が休日の場合は翌日)  
※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

- **観覧料**  
歴史博物館常設展、加藤栄三・東一記念美術館  
高校生以上 300円 (団体240円)  
小・中学生 150円 (団体 90円)  
両館共通で観覧される場合  
高校生以上 500円 (団体400円)  
小・中学生 250円 (団体150円)  
※市内の小・中学生は無料、団体は20名以上  
企画展 常設展料金で御覧いただけます。  
特別展 そのつど定めた金額。

- **交通案内** J R岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園・歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。  
公園内ロープウェイ乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

博物館だより No.69 2008. 8  
編集・発行 岐阜市歴史博物館  
〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010  
(分館) 加藤栄三・東一記念美術館  
〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410